

古本屋の戦後

地方古書店の 生きる道

中川 英治

昭和十六年に戦争が始まって父はずっと大塚で店を開いていたが、昭和二十年の東京大空襲で被災して、母の実家がある水戸に疎開した。

戦争中、水戸で一世を風靡した水戸は県庁があるとはいえ北関東の小さな地方都市だった。そんな町にも、昭和二十年八月二日B29は百六十機もの大編隊でやってきて市街地の大部分を焼失させた。父は、東京と水戸と二度も空襲にあったのである。

父は終戦直後、水戸駅前で本当に小さな店を始めた。それはほとんど露店に近いようなものだったという。

そのころ、水戸には繁華街の南町に龍文堂書店、大工町に高柳書店の二軒があった。県庁所在地にたつた三軒の古書店しかなかったのかとよく聞かれるが、昭和二十年の水戸市の人口はわずかに六万五千人だったのだからまあ適正な数と言えるのではないだろうか。水戸市は実際の市勢よりも、ずっと大きな町に見られるがそれは水戸黄門の印籠のおかげだと思

う。龍文堂書店は洋本だけで、主と

して白っぽいものが多かったという。高柳書店は和本も扱っていて、中には水戸藩の字者の自筆本なども商っていた。どちらともいゆる老舗というわけでもなく、一代目で戦前に開店してそのころはもう老境だった。水戸の古書店で長く続いた店はほとんどない。江戸時代の書店は明治時代には全て廃業していた。

父の店はいわゆる新参者だったから閉鎖的な水戸の町で、母が水戸の生まれとはいえ最初のうちは相当に苦労したらしい。終戦直後はどんな本でも売れたとよく言われるが、水戸に最も多かった水戸学の本はいくらなんでも敬遠されて、ほとんど売れなかったという。その上、空襲で市街地のほとんどを焼失したから、終戦直後のお屋敷からの買い入れなどもなかった。家族を抱えて途方に暮れるような状態だったのではないかと思う。

そのなかでも、よく売れたものは小説本に雑誌などであったが今と違って参考書、理工学書もよく出たという。青木正美さんが書かれていますように、水戸も東京の下町もあまり変わりはないかと思

いる始末だった。今振り返るとよく火事にならなかったと思うし、何百万円も灰にしたような気がする。漫画の付録を青木さんは釘で打ちつけて束にして売ったとお書きになっておられるが、父は五冊あるいは十冊を糊付けして売っていた。ずいぶんそのようにして売ったのに、それをついぞ見たことがない、もうすっかり消滅しているのだろうか。

北関東の片田舎でもたまにはいい買い物もあって、父の記憶をたどると、北茨城市にある野口雨情の生家の近所から、野口雨情宛の署名本を大量に買ったことがあった。白秋はじめ錚々たる詩人、歌人達の署名本で保存も良かった。父はしばらくその本を持っていたが、道楽息子の子のために売ってしまった。今でも極稀に市場でそのときの本を見かけることがあるが、少し胸が痛くなる。

そのころ、水戸の古書店は龍文堂書店、高柳書店の二軒とも閉店して父の店一軒だけになっていたが、やがて大工町に寺内書店が開店した。元新聞記者の知識人で店にもその同僚達や教師などが出入りして相当繁昌していたという。

水戸に二軒の古書店しかない昭和三十年頃茨城県内でも下館に山口屋書店、土浦に井出本屋、日立に佐藤書店だけであった。昭和二

洋書 探求致します!!

古書・絶版書・専門書・一般書
その他、日本では見付け難い洋書をお探しの方々のために国外で探求致します

探索費無料

ご連絡は電話番号明記の上郵便かFAXで

〒370-28 群馬県甘楽郡南牧村
星尾1290

星尾ブックシェルフ
FAX 0274-87-3128

十五年頃まで営業していた土浦の興文堂書店はすでに廃業していた。古書が売れない時代が来て、水戸の寺内書店、土浦の井出本屋も相次いでやめてしまった。この井出本屋は廃業直前に土浦藩の藩主土屋家の倉の整理を依頼され、いま茨城県立図書館が所蔵している徳川斉昭自筆の土屋家宛書簡三十余通などを買い入れたという。これで、県内の古書店は栃木県組合に所属していた山口屋書店を除くと二軒だけになり、当然組合など成り立つわけもなく、神田の市場との交流も全くない状態だった。

そのかわり、セドリ屋さんはほとんど毎週のように誰かが訪れ父が買い入れた本を買ってくれた。特によく来てくれたのは東京の亀有にいた橋本さんだった。また、戦後の一時期は東京の古書店の主人が地方廻りをしていたのだらうか、福岡の田中さんも書いておられた巖南堂さんなども父の店を訪

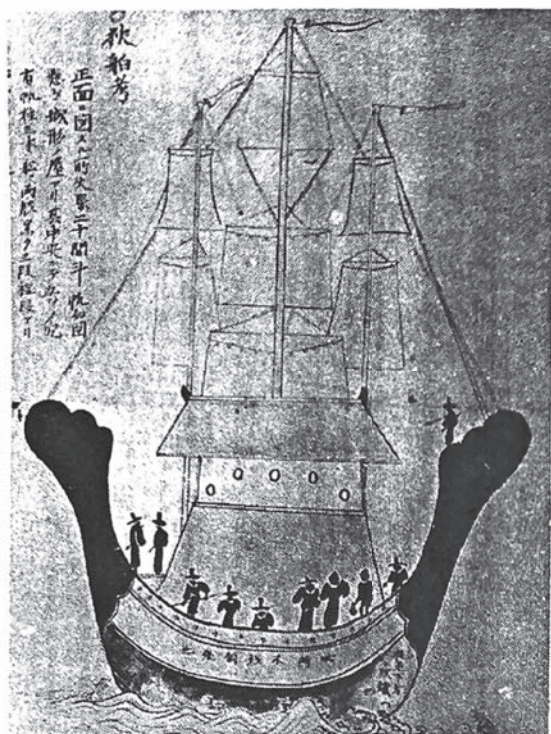
れてくれて、市場に出品できない父には実に有り難い人たちだった。

このように書いてみると、さも買入れが多かったように思われるが実態は大したことがなかった。地方では、古書を買うお客様はいても売るお客様は極端に少ない。体面を気にする人たちがあまりに多いのであろう。「夜中に来てほしい」と言う要望なのでその通りにするとそのお客は門から通りを覗いて「今だ、急いで運んで早く帰ってくれ」と、父に叫んだという。

それでも偶にはいい話もあって昭和三十年代の後半、国会図書館などに自筆史料が多く所蔵されて

いる小宮山楓軒の旧蔵文書をお客様が持参した。水戸藩の学者の自筆書簡や自筆本などどうやう売れるようになった水戸関係のものでもとびきり良い口といえる。なかには、徳川斉昭の異国船を描いた絵(写真)、大津浜に上陸した英国船を描いた巻物などもあった。そのとき購入してくれた方が、後年私に小宮山楓軒の自筆本はとて安くて見たときにふるえた話をして「でも、あの本は一年以上もガラスケースでほこりを被っていたのだ」という。今のように博物館もなくてまだまだ安い時代だったのかも知れない。

その後茨城県立図書館郷土資料



茨城県歴史館「幕末水戸の群像」より

室長のI氏がほとんど毎日のように来店なされて精力的に茨城県地方史文献を購入された。それは、まるで個人の収集のようでは何かにとりつかれたようにみえた。I氏のその努力によって茨城県立図書館の郷土資料は質も量も他県に誇れると思う。

また、彰考館のF館長もお得意様の一人で水戸徳川家に関する文献などを購入された。その上、F館長は彰考館蔵の国文学書の翻刻版出版に関して積極的に許可を出し国文学研究者に今も感謝されている。

そのうちに、博物館のなかった茨城県にもようやく茨城県歴史館が建設され郷土資料を大量に購入してくれるようになる。それは、かえって圧倒的な品不足を引き起こすのだが、戦後から売れない郷土資料を収集し保管していた父には、その資料がようやく日の目を見ることのできる誇らしさがあつたと思う。

昭和四十年代も茨城県内は古書店が増えなかった。昭和四十七年私は神田の高山本店での修業(と言えらるかどうか)を終えて水戸に戻りそれを機会に、父から独立して店を持った。そうして組合を作った。日立の佐藤さんと父と私とたった三軒だったが念願の組合と言えた。全国でもかなり遅い組合

の結成である。その組合が、現在は三十余名と増えている。二十年ちよつとで十倍の成長である。でもそのほとんどが茨城県南部に所在している。水戸から北はやや少ないと思う。水戸の現状は組合員が三軒、非組合員が七軒、今夏、最近流行のブックオフが店舗で開店しその他にまだ出店計画があるというので一気に戦国時代に突入したような感じがする。

地方都市(地方の大都市は除く)の古書店の生きる道は昔も今も険しい。ずっと以前から古書店の専門店化が叫ばれているが、ほんの少数の店で成功しているに過ぎない。私の店でも何年も扱わねばならない。私の店も十数年前移転した折りに漫画、文庫、新書、雑誌などをやめて郷土史、歴史、美術、仏教、文学だけを扱って開店してみたが無惨な結果に終わった。

その点、古書目録だけは少しは特色を出す事が出来る。私も各地の地方都市の古書店と同じように郷土史の目録を作っている。それは父が手がけた分野だったから最初から順調にスタートし、十五年続けることが出来た。そこで、最近一般書の目録も出したがそれは今は今だ苦戦中である。

古書に限らず美術でも郷土作家の作品が最も売れるのはなぜだろうか。身近な作家ということだけ

なのだろうか。単なる郷土愛の発露なのだろうか。水戸では、横山大観は売れるが川合玉堂は売れず、中村彝は売れるが梅原龍三郎は売れず、板谷波山は売れるが加藤唐九郎は売れない。郷土愛が極めて旺盛な地域なのだろうか。

だから、地方ものを扱わないで成功している古書店をいつも尊敬している。その域に少しでも近づきたいと思っている。

父子二代にわたって地方で生きている古本屋の取り留めのない話を長々と続けてしまったが、父の体験は父が去る六月十一日に逝去したため改めて聞くことが出来ず、私が子供の頃から聞いてきたことを思い出しながら記したので、曖昧な点が多いことをお許し下さい。(父中川真一朗への生前のご厚誼に感謝いたします)

(水戸市とらや書店)

「趣味品目録」

第5号…残部僅少

引札・ポスター・カタログなどの広告資料、絵葉書、観光案内、地図、版画、煙草空箱、映画演劇のちらし、パンフレット、雑誌、書籍その他昔懐かしい趣味品全般

◎目録ご希望の方は、収集分野をご記入のうえ葉書またはFAXでお申し込み下さい。(無料)

〒426 静岡県藤枝市瀬古1-14-11

ノスタルジア

FAX 054-646-1836